



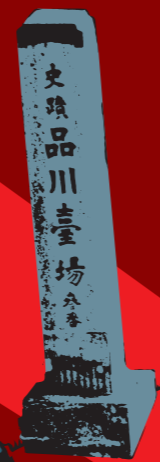
みさわとしひろ デザインイラスト制作を生業とするかわら、見つけた銅像は三六〇度写真に収めるというコンセプトのもと日々幕末スポットに繰り出してはコレクションを続ける。その幕末好きが高じて、ついにオリジナルの幕末グッズを制作し販売中。

オリジナル幕末グッズサイト「伊呂波亭」 <http://irohato.onk.ne/>

あつあつ黒船がやってきました!

open the country to the world!!
KUROFUN

今月からはじまった幕末テーマの散歩道
 一発目はもちろん「黒船」
 たった四杯で夜も眠れず



デートスポットに砲台跡を見に行く!

言わずと知れたデートスポット「お台場」。実はここには砲台があるのだ。お台場に出かけると聞いて「お、砲台を見に行くのか」などと発想する人はあまりいないだろうが、かつてのお台場は幕末の軍事施設であった。幕末の動乱の幕開けとなったペリーの来航。実際に入港してきたのは神奈川県川島の浦賀であるが、江戸湾まで入ってきた黒船に対し幕府はただちに防衛策を張らなければならなかった。そこで作られたのが砲台を備えた人工島であり、その島こそ現在のお台場なのである。名前の由来は「砲台場の訛りだ」とも言われている。品川に砲台場を建てたのはもちろん江戸城内に近かったのだが、幸いにもこの砲台が活躍することはなかったのだが、当初は十一基の砲台場建設が計画された。財政上の都合などで実際に造られたのは六基、その内「第三台場」と「第六台場」の二基が現存している。「第三台場」は開放され現在「台場公園」としてデートスポットとなっている。一方の「第六台場」は立ち入り禁止の島となっているため、木が生え放題で野鳥のデートスポットとなっている。そのお台場に行くには「ゆりかもめ」で「お台場海浜公園」で下車するのが便利。しかし、あえて手前の「芝浦ふ頭」で降りてみる。なぜならここからレインボーブリッジを歩いて渡ることができるのだ。なかかと砲台場を上から見ることができ、なかかと砲台場をのぼることもできるのだ。なかかと砲台場をのぼることもできるのだ。

足をのぼして黒船来航の地・浦賀まで

では実際に黒船が来航した浦賀まで足をのぼしてみる。よく黒船来航当時、日本中がパニックになり庶民は家財道具を積んで我先に逃げたなどと言われているが、実はそれ程でもなく多くの江戸っ子たちは浦賀に詰めかけて、黒船見学を楽しんだらしい。事実、幕府は「黒船見物禁止令」を出しているほどである。それからもうひとつ当時の面白い話がある。黒船襲来に困惑した幕府はその対策案を一般庶民にまで募集した。これは諸大名でさえ幕府の政治に口を出せば罰せられた当時において、異例中の異例なことであった。庶民からは続々と意見が提出され、中には遊郭からの意見もあった。その内容が面白い。ペリーらと酒と色気で酔わせて、刺



1 [台場公園] レインボーブリッジから見た台場公園。かつての第三台場である。 2 [第六台場] こちらは開放されていないため木々が生え放題になっている。奥にあるのがペリー記念ブリカ 4 [台場公園内] 台場公園内部。 5 [品川台場設置の大砲] 靖国神社に展示されている当時の大砲 6 [ペリー公園] 浦賀のペリー来航地にあるペリー公園。奥にあるのがペリー記念館。 7 [芝公園のペリー胸像] アメリカより親善の証に送られたペリーの胸像。その眼前には徳川大名の眠る芝増上寺がある。 8 [ペリー胸像] ペリー記念館の入口に設置されている胸像。

開国してよ♡



身包丁で「一気に刺し殺し、黒船を爆破する」というのである。しかもそこには「ちゃんと「作戦成功のあかつきには遊郭の取り締まりを緩めて下さい」とあったという。他にも似たような意見が多かったらしいが中にはまともな意見もあり、それを出したのが勝海舟である。海舟はこれをきっかけに幕政に起用され、軍艦奉行にまで出世したわけだ。そんな浦賀のペリー上陸地、久里浜には「ペリー公園」が設立されており園内の中央には巨大な記念碑が立っている。ちなみにこの碑文は、長州下級藩士から初代総理大臣になった伊藤博文によるものである。また園内には「ペリー記念館」があり無料で見学することができる。中には当時の資料がいろいろと展示されており、中でも注目すべきなのが「ひとりごと」が聞こえてくる黒船のジオラマである。これはペリーの視線から見た日本の様子がかがえるという珍しい形のジオラマなのだ。浦賀には他にもペリーらに対応した浦賀奉行・中島三郎助の墓や黒船見物にやってきた吉田松陰と佐久間象山が会談した場の石碑などもあり様々な幕末めぐりが楽しめる。また、東京都港区の芝公園にペリーの胸像がある。これはペリーの出生地、ロードアイランド州「ポート市」から親善のしるしに贈られたものである。しかしこの場所は徳川家の菩提寺「増上寺」の眼前。はたして増上寺に眠る徳川お歴々の将軍たちは何を思うのであろうか。